

専門学校 愛知保健看護大学校
保健看護学科

二〇二三年度 入学試験（一般前期）

国語総合（現代文）

注 意

1. 問題は全部で6ページあります。
2. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

問題一 次の文章を読み、あとの問に答えなさい(①)～(⑫)の数字は段落番号を表す。

イギリス人は家畜とは人間が完全に支配すべき、それ自身は自律性を持たない存在と考
えている。人間が人間のために利用する隷属的な存在であるから、A 一切を面倒見る責
任が人間にある。不用な犬や、回復の難かしい病気に罹^{かか}った犬を、自分の手で殺すのは、生
きるも死ぬも支配者としての人間が決めてやるべきだという考えに基いている。 (①)

だから日本人のように、犬を捨てたりすると、人間としての責任をはたしていないと非難
するのだ。従って彼等にとっては、犬を安楽死させることが正しい犬の扱い方となる。一口
に言えば、徹底的な I 中心的動物観なのである。何が残酷で何が残酷でないかは人間の
決めることなのだ。だから一般にヨーロッパ人の残酷という概念は温血動物止りなのであ
る。 (②)

そこで日本で犬が捨てられるとあって、犬のために悲しむイギリスの婦人も、大エビは生
きたまま熱湯に投込んで料理するのが一番味がよいと言って平然としている。また食べる
ためでなく、楽しむために魚を釣るのも残酷ではないのだ。大きなカジキと何時間も海の上
で全力を尽して戦うことは素晴らしいスポーツなのであって、魚が苦しむだろうと考えない
のも同じ理由である。 (③)

もちろんイギリス人でも日本人でも、一般の人はいま述べたような動物観、生命観をはっ
きり意識しているわけではない。きけばいろいろと理屈づけはするだろうが、人々を無意識
に動かしている基本的な価値体系の枠組というものは、実は深くかくれているのである。 (④)

日本の南極観測隊が、氷にとじ込められてヘリコプターでやっと脱出した時、連れて行っ
た樺太犬^{カワト}を置き去りにしてきたことがあった。この時も日本は勿論、外国からも非難の声が
上ったことを覚えている方もあるだろう(南極のエコロジーの破壊を考えていないという非
難は、それなりに正当なものであると私は思うが、ここではその点は考慮外とする)。 (⑤)

隊員たちは、ただ可愛がっていた犬たちを殺すにしのびなかつたのである。誰も犬どもが
翌年まで生きのびようとは考えなかつた。 B 殺す気にはなれないのだ。 C どうで
あろう。翌年観測隊が再び昭和基地を訪れたとき、二頭が生存していたのだ。殺さなくてよ
かつたと隊員たちは思ったにちがいない。人間本位、人間中心の家畜の始末法とは違い、こ
こでは日本人の動物処理法の方が勝つたのである。少なくとも、犬の幸福を中心に考えれば
である。 (⑥)

日本人はもともと犬をとことんまで支配する気がないのである。支配して完全に人間に
隷属させるべきだと思っていないから、支配しようとしただけのことである。言い換える
と、犬に、言うことをきかせるのはどだい無理だと思っただけのことである。 (⑦)

日本人にとつても、飼う以上は主人の意のままになり、言うことをきく犬は、都合がよい
にきまっただけである。しかしこれは II の側の希望であり期待であって、そうさせることが主

人としての人間の犬に対する義務であり責任だと私たちは思っていない。ましてそのように犬を躑け扱うことがⅢの幸福にも通じるなどという、Ⅳにとって或る意味では迷惑千万なⅤ本位の立場は元来日本人にとって無縁のものだったのである。〔⑧〕

もちろん或る文化、或る民族に固有な動物観とは固定的決定的なものではなく、また内容も単一明快なものでもない。イギリス人が犬を^(a)カンペキに近いほど躑けられる原因の一つには、古くからかなりの牧畜文化を所有していたため、家畜の扱いに馴れていることも数えることができよう。また気候風土の関係で、犬と人間が閉鎖的な家屋の、一つ屋根の下に住む必要があったため、厳しく躑けなければ、人間の生活が乱されてしまうからだとも考えられる。〔⑨〕

これに対し日本人は問題とするに足るような家畜文化も持たなかったし、家屋も^(b)カイホウ的であり、高温多湿のため犬と同居することは、必要でもなかったし^(c)トクサクでもなかった。したがって人間と犬が狭い空間を共有することからくる共存のパターンを生み出しにくかったのであろう。〔⑩〕

D 宗教的な理由も一役買っているに違いない。キリスト教は^(d)シュウチの如く動物には魂を認めないが、日本人の古来の宗教は、*アニミズムやシャーマニズムの要素が強く、そこに加重された仏教には輪廻^{りんね}の思想もある。〔⑪〕

このような彼我の世界観の違いは一言にして言えば^(e)断絶の思想と連続の思想の対比である。前者の立場に立てば、人間の優位は決定的であり、後者の立場では相対的なものではない。〔⑫〕

鈴木孝夫「ことばと文化」より

【註】

*アニミズム＝自然界の事物は(現在生命や意志を持たないと考えられているものまで)、すべて固有の靈魂などの靈的存在を持っていると考える原始的な信仰。「アニマ(靈魂)」からできた語。

*シャーマニズム＝シャーマン(日本でいう「巫女」^{みこ})を中心とする宗教の形態。シャーマンとは「自らをトランス状態(忘我・恍惚^{ていごう})に導き、神・精霊・死者の靈などと直接に交流し、その力を借りて託宣・予言・治病などを行う宗教的職能者」(広辞苑)。

問一 傍線(a)～(d)のカタカナを漢字に直して書きなさい。

問二 問題文を内容によって大きく二つに分けるとすると、どこで区切るのが適切か。後半の最初の段落番号を書きなさい。

問三 空欄A～Dに入れるのに最適な接続語を次の(A)～(E)の中から選び、それぞれ記号で書きなさい。

- (ア) また
- (イ) それでも
- (ウ) ところが
- (エ) 逆に

問四 空欄Ⅰ～Ⅴには、「人間」、または「犬」のいずれかが入る。それぞれ適切な方を選び、書きなさい。

問五 次の(ア)～(オ)の中から、筆者の考えに即し、イギリス人が「残酷である」と感じるケースをすべて選び、記号を書きなさい。

- (ア) 南極にいる樺太犬を置き去りにすること。
- (イ) 生きた大エビを熱湯に投げ込むこと。
- (ウ) 不用な犬を安楽死させること。
- (エ) 大きな魚を釣ろうとして何時間も引きずり回すこと。
- (オ) 犬を生きたまま捨てること。

問六 ⑤段落に紹介されているエピソードについて、イギリス人は、どのような処理をすべきであったと主張すると考えられるか。簡潔に書きなさい。なお、樺太犬は連れ帰れる可能性はないものとする。

問七 傍線(1)とあるが、(i)「断絶の思想」、(ii)「連続の思想」それぞれを、イギリス人の動物観と、日本人の動物観に読み替えるとそれぞれどちらを指すと考えられるか。「イギリス人」または「日本人」のいずれかで答えなさい。

問題二 次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

その日、彼は夕方というには少し間がある時刻にバスに乗っていた。取引先の重役の家に不幸があり、彼は出入り業者の営業責任者として、通夜の準備の手伝いに行くところだったのだ。

ターミナル駅からはタクシーで行くつもりだったが、時間に余裕があったこともあり、ファクスで送ってもらった略図がバスの停留所からになっていたこともあって、バスで行くことにした。

バスに乗るのは久しぶりだった。都内のマンションに住む彼は、通勤には電車を使うだけであり、仕事ではタクシーと地下鉄でほとんど用が足りていた。

乗客の大半は女性か老人で、あとは制服姿の中、高校生が眼につくくらいだった。彼がバスに乗り込んだとき、席はまだ二つ、三つ空いていたが、あえて座らなかつた。座つたあとで、席を譲らなければならなくなるのがいやだったからだ。譲ることがいやなのではなかつた。譲るべきかどうか悩まなくてはならないこと、席を立つても相手が素直に座ってくれずバツの悪い思いをすること、さらに自分が譲ることでの近辺に座っている人たちに小さな罪悪感を覚えさせてしまうことがいやだったのだ。だから、彼は電車の中でもめつたに座ることがなかつた。

彼は降車口の近くに立つて、壁面に貼られている結婚式場やエステティック・サロンの広告を眺めていた。

その時、不意に声がした。

「これ、もらっていただけませんか」

それはごく穏やかな声だったが、静かなバスの中ではことさら大きく響いた。

彼が声のする方に眼をやると、降車口より少し後ろの二人掛けの席に品のよさそうな老女が座っており、手に半分に切られた太い大根が握られていた。そして、その隣には、すぐ前の一人掛けの席にいる少女の母親と思われる女性が座っていた。⁽¹⁾「どうやら、老女がその若い母親に大根をあげようとしているらしい。」

唐突なことに若い母親が戸惑っていると、老女は弁解するように言った。

「ひとりなもので、一本では多すぎるんですよ。でも、一本でなければ買えないし……」

若い母親があいまいに頷くと、老女はまた言った。

「これ、もらってくださいると助かるんですけど」

「いえ、でも……」

たぶん、その老女はターミナル駅のどこかの食料品売り場で買い物をしてきたのだろう。そこで大根を一本買った。それはひとりではもてあますほど太くて長い大根だったが、その売り場には一本単位でしか売りに出ていなかった。いや、もしかしたら、その老女は、たとえ半分売りがあつたとしても、大根は一本で買いたいという思いがある人だったのかもしれない。そして、ビニール袋に入れる際、あまりにも長いため半分に切ってもらつておいた……。

彼はすぐに視線をまた広告に戻したが、その老女を見て母親を思い出さないわけにいかなかつた。彼の母親もまた、大根を一本でしか買いたいそうもないタイプだったからだ。母親は東京から一時間ほど離れた地方都市に住んでいた。父が死んでからは古い借家にひとりで暮らしている。狭いマンションで一緒に暮らすよりは気楽だろうと思ひ、また、母親自身もそう言うのでひとりで暮らしてもらっている。

しかし、老いてひとりで暮らすということは、日々の生活の中で、この老女のように大根の半分をどうしようかと悩むことでもあつたのだ。⁽²⁾彼は初めて母親がひとりで暮らして

いるということの意味が理解できたように思えた。これまでは、あえてそのことは考えないようにしてきたところがあつたのだ。

「もらっていただけませんか」

老女がまた言った。

「ええ、でも……」

若い母親のためらいの言葉を耳にしながら、⁽³⁾ なんとかもらってくれればいいが、と彼はひそかに願っていた。

「ひとりだとこんなには食べ切れないますよ」

若い母親は、ようやくもらうべきだと判断したらしく、どういふことになるのかと振り返って見つめていた少女に、ただただこうかしら、と相談するように言ってから、老女に向かって訊ねた。

「ほんとにいただいちゃって、いいんですか？」

「どうぞ、どうぞ」

「それじゃ遠慮なく」

すると、老女は嬉しそうに言った。

「無駄にならなくてよかったわ」

そのやりとりを聞いて、彼だけでなく、⁽⁴⁾ バスの中にホツとした空気が流れたのがわかった。

老女は前の席に座っている少女に声を掛けた。

「おいくつ？」

「九歳」

「まあ、大きいのね」

老女はそう言うと、独り言のように呟いた。

「うちの孫の方がひとつお姉ちゃんだわ」

その瞬間、彼の胸が痛んだ。自分にも十歳の息子がいる。その老女が自分の母親でもよかつたのだ。

あるいは、自分の母親も買い物をするたびに大根の半分に心を悩ませているかもしれない。そうした意味では、自分が親子三人で送っている安定した東京での生活も、離れて住む母親にいくつもの小さな悩みを押しつけることで成り立っているといえなくもないのだ。

⁽⁵⁾ もちろん、母親と一緒に暮らそうと言っても断るだろう。しかし……とバスの中で彼は思っていた。⁽⁶⁾ 自分は、眼の前に席を譲るべき人が立っているのに狸寝入りをしているような男と、ほとんど同じようなことをしているのではあるまいか、と。

沢木耕太郎「彼らの流儀」より

問一 傍線(1)とあるが、「老女」が大根を隣に座っている「若い母親」にあげる気持ちになったのは、一人では食べきれないこと以外にどんな理由が考えられるか。本文から読み取れる理由として最適なものを次の(ア)～(エ)の中から一つ選び、記号で書きなさい。

(ア) 自分のひとり暮らしの寂しさを、誰かに打ち明けたかったから。

(イ) この母親なら、日々の生活での自分の悩みを理解してくれると思ったから。

(ウ) 自分と同じ悩みを持つ主婦であることを察し、力になりたかったから。

(エ) 自分の孫娘と同じくらいの年齢の娘がおり、親近感を覚えたから。

問二 傍線(2)とあるが、どういうことが「理解できた」と言うのか。具体的に示されている箇所を六十字前後で過不足なく抜き出し、最初と最後の五文字を書きなさい。

問三 傍線(3)のきつかけとなる「彼」の心理の変化を示す箇所を、二十五字で抜き出して書きなさい(句読点は字数に含まない)。

問四 傍線(4)とあるが、その理由と関係が深いことを述べている箇所を文中から三十字以内で抜き出して書きなさい。

問五 傍線(5)とあるが、筆者はその理由としてこれまでどのようなことを考えていただろうか。次の説明文の空欄に入るように、文中から適切な箇所を二十五字以内で抜き出して書きなさい。

「彼」は、自分の母親が息子たち家族と と考えていた。

問六 傍線(6)の比喩は、具体的にはどういうことを言っているのか、A「眼の前に立つ席を譲るべき人」、B「狸寝入りをしている男」がそれぞれ(i)誰の(ii)どのような状況を言い換えているのかを明らかにして、説明しなさい。

